

序文

外国語学習者の発音には、たいてい音声的な歪みが現れます。発音の誤りには様々な原因が考えられますが、母語と目標言語における音声体系の違いが基本的な意味を持ちます。

本書は、実践を目的としたものであり、また発音調査の期間が短かったことから、理論事項は示唆するだけにとどめておきました。練習問題は主に、学生が一人でもしくは教師の手助けを伴って行えるように作られています。従って、本書では、日本語とポーランド語の音声・音韻体系の体系的な比較は行いませんでした。また、ある特定の発音の誤りを取り上げてその原因を分析する、誤りの意識や統計を調べるといったことも、ここでは行いませんでした。これらは、今後の研究及び理論研究の課題となるでしょう。そして、それらの研究はむしろ、日本人学生にポーランド語の発音を教える教師の側にとって役立つものとなるかもしれません。

歪みのない正しい発音は難しく、かつ長時間に及ぶ鍛錬の賜物でしかあり得ません。しかし、学習者にとって、ポーランド語のネイティブスピーカーとのやりとりの中で、正確に情報を伝えることが出来るようになれば、十分に満足していく結果といえるでしょう。

本書の一番の目的は、東京外国語大学（T U F S）ポーランド語学科の学生のために、ポーランド語発音学習の具体的な手引きを提供することにあります。

「イグレックきらい」の中の練習問題は、難しい音の発声法を理解する直接的な指針となるはずですが、本書は、出来る限り分かりやすく、親しみやすい方法で、ポーランド語と日本語の発音の違いに注意を向けさせ、ポーランド語の難解な音を習得する手助けをしようというものです。

例として挙げられている資料は、私がT U F Sの学生のために開いた「発音クリニック」の中で行った発音調査（記録と録音）および練習問題からとったものです。この「クリニック」は個人レッスンで、5ヶ月間にわたって行われました。この発音調査にあたって私が用いたのはG. Demel、D. Antos、G. Demel、I. Styczekの練習帳ですが、柔軟かつ選択的に用いるようにしました。というのもそれらは、ポーランドで学校に通う児童の発音調査を目的とした発音矯正のためのテキストだからです。予想される通り、それらを用いても日本人の発音に現れる全ての歪みに対処することはできませんでした。

学生とのレッスンを重ねるにつれ、発音の誤りが語単位で起こるのみならず、会話、音読においても現れることに気が付きました。またある種の誤りが、学生の大部分に共通して繰り返し現れることも分かりました。この繰り返しの傾向が、ポーランド語のどの音が日本人にとって最も難しいのか、またコンテキストによって意外な箇所に変形が起こるのはどの音か、ということ判断する指針となってくれました。私のこの見解を示すために、二つの例を挙げましょう。典型的な歪みは *sz, ź/rz, cz, dź* の音の軟化現象です。最初のいくつかの練習の後に判明したのは、これらの音が前舌狭母音、つまり *e* と *y* に続いて現れる時に、修正するのが最も難しいということでした。*e* や *y* を発音する時には、舌全体が上へ持ち上がります。このような状態で *sz, ź/rz, cz, dź* を発音しようとすると、いわゆるシュー音の軟化音 (*sz'*) もしくは軟音 (*ś*) に変形して現れます。ポーランド語では似たような現象は見られません。

二つ目の例は *l* の調音方法で、これは日本語のはじき音の形で現れます。この音は *klucz, bluzka, dla, plecy, dlaczego* のように、破裂音の後に現れる時に最も矯正が難しいものです。閉鎖そして破裂から、滑らかな *l* の音へと移行させることがとりわけ難しいようです。

上記の観察から分かるように、日本人の発音調査のためのテキストを作成するのは非常に難しい作業です。三カ所（語頭、語中、語末）に音が現れるテキストだけでは、見えてこない歪みもあります。その一方で、異音、すなわちポーランド語の音声として現れ得る全ての形態を扱うとなると、範囲が広過ぎる可能性があります。練習のための適切かつ十分なカテゴリーの選択に関してはまだ今後の課題と言えるでしょう¹。これまでの調査では、私自身の観察を元にして、まずは統計的に最も歪みを起こしやすい音を調べることから始めました。様々なテキストの音読も、前後の音の影響で発生する誤りをとらえるのに役立ちました。

外国語としてのポーランド語教授の理論家たちは、音を個別に練習するのではなく、単語として与えることが必要だと主張します。これは重要な指摘です。しかしながら、誤りの性質が、別の音への置換ではなく変形による場合、単語を繰り返しても成果は出ません。学生が調音方法（調音器官の働き）を知らない時、もしくは更に悪いことに、誤りに全く気付かない場合（音韻論的聴覚の問題）、単語そのものを繰り返しても成果は期待できないのです。その場合に必

¹ここで必要なカテゴリーとは母語からの干渉かもしれない。しかしこの問題に関しては更なる観察が必要である。

要なのが、発音矯正の実践から生まれた訓練です。これらは主に二種類の訓練であり、一つは音韻論的聴覚を鍛えること、すなわち音を区別できるようにすること、そしてもう一つは正しい調音方法を教えること（運動感覚・運動筋肉的な模範の形成）です。

音声学的訓練において、私は模倣、音読、翻訳という方法論、また録音技術を用い、学生の自然な発言も観察しました。模倣においては、学生が単語、音節そして時に個々の音声を真似して繰り返します。個々の音の調音に際して、調音器官の図が役に立つことが分かりました。本書にもものせてあります。舌の動きは、時に手の動きでも示されました。またどの作業も、学生が教師の真似をして調音器官を正しく働かせられるように、鏡の前で行われました。時に、発音矯正の実践にヒントを得て音声を引き出す方法も行いました。学生の素質によって、発音に際して調音器官を正しく配置させる機械的方法、もしくは、正しく発音されている別の音を変形させることで目標の音を引き出す音声学的方法を用いました。正しい発音を定着させる方法として、音読並びにテキストの翻訳をさせました。テキストは学生本人が選んだ素材が多く、練習へのより大きな動機となったと思います。また、テキストは録音され、分析、矯正のために教師と学生が共に聞きました。実際に行った練習の録音とメモが、本書第一部の資料としてとても役に立ちました。

第一章は二部構成になっています。説明的な役割を担う第一部では、まず、外国語としてポーランド語を学ぶ全ての人に役立つと思われる、ポーランド語発音の基本に関する全体的な説明、そして、ポーランド語の音を発音するために調音器官を運動感覚かつ運動筋肉の観点から準備させるための訓練についての説明があります。また、訓練における基本的なルールと、練習の流れについても述べました。第二部では、個々の音に関する発音矯正の練習がのっています。誤って発音されがちな音から順にのせています。難解な音に関しては以下の情報を含んでいます。

1. 問題点、つまり、ポーランド語と日本語の音声的差違から発する歪みについての記述。
2. 最低限の理論——ポーランド語の音が発生する仕組み。
3. 音を発している時の調音器官を示した図。とりわけ、音が「発生する」場所が強調されており、有声／無声、調音器官の接近度合いも示されている。
4. 正しい調音方法（様々な方法論を用いて）。
5. 練習：その音を含む音節、単語、文章。
6. 追加情報、余談。

本書はハンドブックとしての性質を備えているので、理論的な情報は必要最低限に限られています。体系的な講義という形にはなっておらず、比較と実践の目的のみに使用しました。指示は、学生が一人で読んで練習することも考慮して、最大限簡単な方法で書かれています。可能な範囲で対照的な説明も加えています。また、発音矯正の専門用語を使うことは極力避け、例えば「舌端裏前部」は「舌尖」、「上蓋部歯区部」は「上歯」、「鼻腔」は「鼻」などの語を用いています。また、ある音の調音に際して全く活動しない調音器官については言及していません。残念ながら、「歯茎」「摩擦」「閉鎖」など、いくつかの用語に関しては避けられませんでした。代わりに、図、色、追加の指示などによって分かりやすくなるよう心がけました。

練習のための単語群に関して、当初は、ある一つの音がポーランド語において現れうる全ての位置で登場するように選ぶつもりでした。しかしながら、頻度があまりに低いもの、あまりに難解で日常会話で役に立つとは思えないような単語に関しては練習に組み込むのをやめました。珍しい単語の例としては *zgać* [切り付ける]、*rzec* [嘶く]、*znać* [刈る]、*zmija* [まむし]、*zbik* [ヤマネコ] などが挙げられます。従って練習問題に出てくるのは何よりもまず、頻度の高い基本的な語彙で、可能な限り、学生が知っている単語です²。練習中の音を含んだ個々の単語は、発音の難易度順に並べてあります。国際音声記号の理解そのものの難しさ、それに伴う学習の遅れを避けるために、本書では正書法による表記を用いています。例えば[książka] [本] のように、正書法に従って、単語の発音が記されています。この表記法によって示されているのは、学生達がと

² 基本語彙のみを用いて練習用の音の組み合わせを作り出すことの難しさから、時に *wulkan* [火山]、*chryzantema* [菊]、*śliwa* [梅]、*kasztan* [栗] など、基本語彙には属しないような単語に出会うこともあるかもしれない。しかし、せめて学生が自らの世界について描写する際に役立つと思われる（最初の3つ）単語、もしくはポーランドの現実を知るのに役立つ単語（高校卒業試験の時期には栗がよく話題にのぼる）を選ぶよう努力した。

りわけ問題を感じている、無声化有声化の現象に限られています。

第二章には、正しい発音を定着させるための資料が収められています。短いテキストを用いて練習することによって、単語内の発音だけでなく、しばしば文字通り発音されてしまっている単語間の発音を修正するのにも役立つでしょう。

指示通りに学習しても、監督や音声的な模範なしでは発音の問題を完全に解決することはできません³。矯正の度合いは、正しい発音の良い模範を得ること、そして学生自らポーランド語の音に耳を慣らすことで大きく変わります。この「耳慣らし」は音韻的聴覚の形成と密に結びついており、単語の中からある特定の音を聞き分け、認識することを可能にします。その後になってやっと、その音を自ら生成するという段階に至るわけです⁴。学生が正しい発音と誤った発音の区別が出来ない場合に、自己修正は不可能です。音韻論的聴覚を鍛えるには様々な練習があり、教師によって授業で行うこともできます⁵。また、一人で訓練するための練習を含んだCDが役に立つでしょう。準備期間が短かったことから、CDは本書よりも少し遅れて完成する予定です。授業を進める中で、私は学生達を難しい音に「敏感にさせる」ように努力しました。本人が自らの誤りに気付いていないということが多くあったのです。ほんの些細な指示、誤りに注意を向けさせるだけで、発音がずっと正確なものになりました。例えば、s, z, c, dzの音は、それ自体問題はないはずなのですが、それでも誤りが見られました。一人の女子学生は、ś, ź, ć, dź（シー音）と s, z, c, dz（スー音）そして、sz, ź/rz, cz, dź（シュー音）の三つの大きなグループの区別が、ポーランド語では必須であるということ意識せずに、これら全ての音を中間音として発音し、その結果 sz, ź/rz, cz, dźの軟化した音のようになってしまっていました。この問題に意識を向けさせ、そして一連の訓練を終えた後に、発音はずっと理解しやすいものになりました。現在では二つのグループ、シー音とスー音のグループに関しては既に「きれいに」発音できています。最も難しいシュー音に関してはまだ練習が続いています。

³ 学習の最初の段階ではポーランド語の音が収録されたビデオを用いることもできる。*Głoski polskie. Kaseta wideo i przewodnik* (1993)を参照のこと。

⁴ G. Balkowska は、音韻論的聴覚、そして正しい調音的模範の発達のために、最初の段階では教科書なしで勉強するのがよいと述べている。学習の最初の 16–20 時間はただ聞くこと、そして繰り返すことを勧めている。G. Balkowska (2004)を参照のこと。

⁵ B. Rocławski (1991)の練習を用いるのもよいだろう。また、D. Gałyga によって出版が予定されている、発音練習のためのマルチメディアのセットも役にたつかも知れない。D. Gałyga (2005)を参照のこと。

テキストの音読により、単語内、単語間の同化現象についての知識不足も明らかになりました。書き言葉と話し言葉の違いを述べたり、誤りがもたらし得る危険を指摘したりすることもまた、その誤りを避けるのに多くの場合で役立ちました。時に、私は生物学・物理的観点から調音のプロセスを学生に説明しました。例えば学生が *z* と *dz* もしくは *ẓ* と *dẓ* の違いを聞き取れない場合などです。そういった場合、誤りを訂正する基本となるのは調音器官の接近度をコントロールすることです。よく学生から「舌はどこですか」「舌は（歯や口蓋に）触れていますか」などの質問を受けました。音の発生方法、そしてその調音における調音器官の配置を知ることは、難しい発音を正しく発音する基本となっていたように思います。

本書は、私が「発音クリニック」の枠内で行った発音矯正授業の成果です。T U F S ポーランド語学科の学生の発音調査というプロジェクトを発案し、進めて下さったのは関口時正教授です。この場をお借りして関口先生に感謝の意を表したいと思います。学生との共同作業を可能にして頂いたこと、調査の結果について報告、相談の際に頂いたアドバイス、提案の全てに感謝しております。また、私の授業に通って自らの疑問を私と共有し、成果を得るために熱心に練習を続けてくれた、T U F S ポーランド語学科の学生の皆さんに感謝したいと思います。ありがとうございました。

池田アンナ

2006年 東京